

戦前期ハルビン絵はがき Web 検索システムの試作

出口 直輝*1 千葉 正史*2 林 幸司*3 毛利 康秀*4 松重 充浩*4 谷 聖一*4

*1 日本大学大学院総合基礎科学研究科 *2 明治学院大学

*3 一橋大学経済研究所 *4 日本大学文理学部

データベース化された作品や関連資料と地理情報とを関連付けることで、作品を取り巻く諸々の時間と空間を越えた重層的な理解を補助できる可能性がある。本研究では、これまでにデジタル化したハルビン絵葉書(黒崎コレクション)を活用するための Web 検索システムを Google Maps API を利用して試作した。このシステムでは、Google Maps 上に絵葉書の画像を表示することで体感的にも視覚的にも効果的なインタフェースの提供を目指した。単にアーカイブ閲覧時の利便性を高めるだけでなく、絵葉書の持つ歴史資料としての価値を顕在化させることが期待される。本稿では、絵葉書が持つ歴史資料としての可能性を論じた後、構築したシステムの概要を紹介する。

The Trial Production of the Period before the War Harbin Picture Postcard Web Search System

Naoki DEGUCHI*1 Masashi CHIBA*2 Koji HAYASHI*3

Yasuhide MOHRI*4 Mitsuhiro MATSUSHIGE*4 Seiichi TANI*4

*1 Graduate School of Integrated Basic Sciences, Nihon University *2 Meiji Gakuin University

*3 Institute of Economic Research, Hitotsubashi University *4 Nihon University

There is a possibility that understanding of over the time and the space can be assisted through connecting works or related materials with geographical data. We developed a prototype of a web search system of Harbin picture postcard with Google Maps API. This system has an effective interface. It would be able to alleviate a complexity of viewing a digital archive.

1. はじめに

データベース化された作品や関連資料と地理情報とを関連付けることで、作品を取り巻く諸々の時間と空間を越えた重層的な理解を補助できる可能性がある。周知の通り、近年の歴史研究においては、従来看過されてきた様々な資料群から新たな「資料価値」を引き出し歴史像の豊饒化を図る試みが、情報機器の機能駆使および新機能の開発と並行して重ねられている。その試みの一つに、19世紀末に登場した絵葉書[1]を対象とした研究があり、既に、貴志俊彦氏をはじめとした貴重な成果が蓄積されつつある[2]。

日本大学文理学部情報科学研究所では2003～2007年度に文部科学省私立大学学術フロンティア推進事業の選定を受け「デジタルアーカイブ・インフラストラクチャの構築と高度利用」という研究プロジェクトを実施した。その一環として、「ハルビン絵葉書(黒崎コレクション)」のデジタル化を行った。これは、黒崎裕康氏のご厚意により、黒崎氏が所蔵するハルビン絵葉書黒崎コレクション2990件のデジタル画像化とその学術利用の許可を頂き、その中から重複している部分などを除いた1177件をデジタル化し関連情報を登録したものである。さらに、それらのうち224件をインターネットで検索できるシステム上に登録した[3]。

デジタル化した黒崎コレクションのハルビン絵葉書群の有する資料価値は、地理資料と歴史資料の両面から指摘できる。それを有効かつ容易に活用できるよう本研究では、Google Maps API を利用して、ハルビン絵葉書アーカイブを活用する Web 検索システムを試作した[4]。Google Maps 上に絵葉書の画像を表示することで、体感的にも視覚的にも効果的なインタフェースを提供することを目指した。地図上の一部分に着目させたり、アイコンを表示させたりするための技術を組み込むことで、デジタルアーカイブ閲覧の利便性を高めるばかりでなく、絵葉書の持つ資料価値を顕在化させることが期待される。今回構築したシステムは、2008年11月1日～3日に開催された「JAPEX'08:満州東北切手展」の会場において限定公開したシステムを基礎としている。展示用システムでは Web ブラウザにプラグインをインストールする必要がある Silverlight を採用していたが、本システムではプラグインを必要としない方式を採用した。公開当初は日本人が多く居留していた地区が含まれる埠頭区を中心に約80件の絵葉書を登録した。その後、2・3節で述べるランドマーク物件を中心に追加をし、現在約110件のデータが登録されている。

2. 歴史資料としてのハルビン絵葉書の利用価値

ハルビン絵葉書アーカイブの有する資料価値は、地理資料と歴史資料の両面から指摘できる。デジタル化しそのデータを整理することで、かつてのハルビンの都市景観とその経年変化の可視化を試みてきたが、まさにそれは近代ハルビン史の実態を明瞭に反映する資料としての価値を有するものである。

2-1. 他の資料にはない絵葉書の資料としての可能性について

絵葉書が持つ資料としての可能性については、以下の3点があげられる。

(イ) 一つの景観に関して様々なアングルから、かつ一定の時間的なスパンの中で撮影された大量な画像が残存する絵葉書資料は、その画像を相互に比較対照していくことで[この過程で「作為」(フェイク)の炙り出しも可能となり得る]、景観の時空変化を立体的に再構築することが可能となる。これは、定点観測的な写真の集積量が少ない 19 世紀末から 20 世紀前半において、絵葉書が当該問題に関して極めて貴重な資料となっていること意味している。

(ロ) 絵葉書に採録されている画像は、単に客観的な事実が写し出されているということではなく、その画像をそのアングルと構図で採録したいという作製者(撮影者、作画者)側の意図(作為)が反映したものである。そして、その意図は、当該時期の時代的規定性から自由であるものではなく、当該時代の「時代的精神」(その時代のトレンド)を色濃く反映していると考えられる。とりわけ、絵葉書という一般の人への「販売」を念頭において作製されたものでは、その可能性が極めて高いものとなっていると考えられる。

このことは、ある時期の絵葉書の多くの事例から共通的な特徴が見出せるとすれば、そこから当該期の「時代的精神」の象徴を抽出することが可能であることを意味するものである。しかもそれは、単に文献的に確認できる「時代的精神」を追認するというものではなく、「視覚」に訴えるという方法をとっていることから、「時代的精神」が身体化(内面化)されていくところの具体的過程を示し得るという、文献資料では難しかった過程の解明へ寄与し得る貴重な資料ともなっている。

(ハ) と同時に、絵葉書の画像、とりわけ写真画像には、上述(ロ)で述べた作製者の意図から逸脱した事象が結果として写り込んでいる場合があり、そのことが、当該期の「時代的精神」からすれば、副次的な、あるいは、潜在的な、様々な事実や可能性を示すものとなっていることも、絵葉書資料の持つ重要な可能性となっている。

即ち、絵葉書の大量な画像情報から前述本項

(ロ)から外れた諸事象を抽出し、それらの間の連関性を分析・解明することで「時代的精神」と異なる、しかし、明確に(可視的に)存在する当該期におけるもう一つの言わばメタレベルの構造を開示することが可能となる。更には、それが「時代的精神」と如何なる相互連関的・相互依存的な関係を持っていたのかを追究することで、当該期当該地域の全体的構造をより実態的に把握する道を開くこととなる。しかも、それらを時系列的に再構成することで、唐突(偶然)に見える事象の変容を、その背景的な連続性から、別言すれば、歴史的に説明していく理路が発見される可能性も開かれることとなる。これらの点は、5 節で詳述するが、現代歴史学における重要かつ喫緊な課題の克服において、絵葉書資料が持つ重要な可能性を示すものとなっている。

2-2. 絵葉書の時代推定の方法について

ここでの「時代推定」とは、絵葉書本体の発行時期を指しているとして、その判定に関して、本研究では、それぞれ、以下の方法により推定をおこなった。

(1) 絵葉書本体

これは絵葉書に記載された文字データを基礎に判定をおこなった。例えば「満洲国郵政」といった文字が印刷されていれば、同絵葉書が、1932～1945 年に発行されたものと推定するという方法である。これは、記載される文字情報が複数の部門(切手、消印、葉書日付け、等)に亘れば、それだけ精度の高い情報が得られることとなる。例えば、「満洲国郵政」との印字に加えて消印日付があれば、その絵葉書は 1932 年から日付までの間で発行されたことになる。また、後述する写真情報からも時代情報を絞り込むことができる。

(2) 絵葉書の写真(絵)

これは「建築物の変化」に代表される「景観」の変化から写真撮影の時期を割り出し、絵葉書の発行時期をその時期以降と推定する方法である。例えば、ある建物の建築年代が判明している場合、その建物が写された写真の絵葉書は、建物が建設されて以降に発行されたものであることが推定できる。

以上が本研究で使用した時代推定方法であるが、絵葉書の発行時期の特定は極めて難しく、ある建物の建設が 1931 年で消印も 1931 年中のものといった極めた例外的なもの以外は、10 年程度あるいはそれ以上の「幅」をもった推定の域をでないことも事実である。これは、絵葉書に繰り返し印刷されたものが多く、全く同じ形態の絵葉書でも、発行年が異なる場合があることに加えて、本システムに関して言えば、黒崎コレクションの大半が未使用絵葉書だったため、上述(1)の作業が難しかったことも大きな理由となっている。

2-3. ハルビン絵葉書アーカイブが有する資料価値

ここでは以下の3つの「三」をキーワードとして用いることで、その一部を紹介したい。

- 三地区 = 秦家崗(ノヴ・ゴード＝南岗区), 埠頭区(プリスタン＝道裡区), 傅家甸(フージャデン＝道外区)
- 三時代 = ロシア革命前, ロシア革命～満洲事変前, 満洲事変後
- 三カ国 = ロシア, 中国, 日本

(イ) 三地区：地理情報から見える戦前期ハルビンの都市構造

地理情報に関しては、黒崎氏による調査データを基礎に絵葉書中の建物・施設等の物件を特定することで把握を進めた。こうした「ランドマーク物件」は合計で 102 件を特定することができたが、その所在地は以下のような分類となった。

秦家崗:33, 埠頭区:43, 傅家甸:12, その他:14

この様に明確に上記の三地区に集中する傾向が見られる。更に各地区の中でランドマーク物件が多く存在する街区を挙げれば、以下ようになる。(括弧は現在の地区名)

- 秦家崗：東大直街 8, 車站街(紅軍街) 7, 西大直街 5, 義州街(奮闘路) 4
- 埠頭区：キタイスカヤ街(中央大街) 16, モトスワヤ街(石頭道街) 7, 地段街 6
- 傅家甸：正陽大街(靖宇街) 6

一方でこれを物件の性格別に分類すれば、これらの三地区はそれぞれ以下のような件数となった。

- 公共施設(官公庁, 学校, 公園, 公益事業など)：秦家崗 19, 埠頭区 10, 傅家甸 2
- 商業施設：秦家崗 5, 埠頭区 30, 傅家甸 10
- 宗教, 記念施設(教会, 寺院, 記念碑など)：秦家崗 8, 埠頭区 3, 傅家甸 0

各地区の傾向を指摘すれば、公共施設や宗教施設が集中する秦家崗に対して埠頭区と傅家甸は商業施設の比重が高く、戦前期ハルビンの都市空間構造をここから読み取ることができる。この様な形で、本アーカイブはかつてのハルビンの姿を地理的に再現する手段として用いることが可能なのである。

(ロ) 三時代と三カ国：絵葉書から読み解く近代ハルビンの歴史

次に歴史資料としての価値を紹介するが、ここでは上記の三時代に分けてハルビン史の展開を追うとともに、ロシア・中国・日本の上記三カ国がいかに時代ごとにその存在感を変化させていったかという観点に立って述べていくこととしたい。

① ロシア革命前

近代ハルビンの歴史は、周知の通り日清戦争後にロシアが建設・運営権を獲得した東清鉄道(1912 年

以降は中東鉄道または東支鉄道)の附属地が置かれたことに始まる。1898 年より都市建設が開始された初期のハルビンを撮影した絵葉書は、数量的には少ないが黒崎氏の所蔵する絵葉書の中に複数含まれている。そこからうかがえるのは、まさにロシアの満洲進出としての拠点としての都市ハルビンの姿である。同時期の中心的な題材は、まず鉄道・行政・軍事の中核として整備が進められた附属地の南側に位置する秦家崗の後継であり、ハルビン駅や鉄道庁・鉄道倶楽部・鉄道技術学校などの東清鉄道関係施設、アムール軍事司令部など駐屯ロシア軍の施設、聖ニコライエフスキー寺院(中央寺院)そしてチューリン洋行などといった建築物が取り上げられている。一方で附属地北側の埠頭区については、同時期より商業地区として発展していくこととなった。絵葉書には例えばキタイスカヤ街や創建初頭の聖ソフィスカヤ寺院などが取り上げられており、初期の同地区の景観を示す貴重な資料である。

この様に、同時期の絵葉書からはロシアの支配・ロシア人の存在感というものがまず強く感じ取れるが、一方でハルビンへの進出を開始した中国人の姿も随所に記録されている。例えばキタイスカヤ街の街頭を撮影した絵葉書(図 1)には、その名の由来となった中国人の姿が道端にしっかりと写りこんでいる。そして附属地に隣接する傅家甸には中国人街の形成が開始され、多くの人や馬車が行きかう同地区の殷賑な繁栄ぶりが既に同時期に始まっていることを我々は絵葉書の光景より知ることができるのである。



図 1 キタイスカヤ街チューリン支店(一部拡大)

最後に当時のハルビンにおける日本人の存在については、はなはだ影の薄いものだったと指摘せざるを得ない。後に解雇されるようになる日本人の事績としては、日露戦争に際して東清鉄道などの破壊工作を試みてハルビンでロシア軍に処刑された「横川・沖志士」と「小林・向後烈士」の存在があり、そして 1909 年にはハルビン駅において伊藤博文暗殺事件が起こるのであるが、現地への日本人の進出に関しては、絵葉書からは 1910 年代に相次いで開設さ

れた横浜正金銀行と朝鮮銀行の支店が見出せる程度である。

② ロシア革命～満洲事変前

こうした状況が一変する契機となったのが、1917年のロシア革命である。ハルビンにも多くの白系ロシア人が難民として押し寄せ、その貧窮した姿を撮影した写真はロシア人を取り巻く環境の激変を雄弁に物語る。中東鉄道の運営については国際管理を経て最終的にソ連政府が継承することとなったが、そのことはまたハルビンのロシア人社会における赤系と白系の対立という状況も生み出していった。本国での急進的な改革への反発から、白系ロシア人コミュニティにおいては伝統文化への回帰が強まったようであり、同時期には聖ソフィスカヤ寺院が現在も残るドーム型の聖堂に建て直されたほか、ウクライナ寺院など新たな教会の創建もなされている。

このように、ハルビンにおけるロシア人の存在感は革命によって直ちに低下したわけではないが、その政治的影響力は確実に後退し、同時期には中国側が利権の回収などで存在感を増していった。その中心的な施策となったのが鉄道附属地の行政権回収であり、1920年に東省特別区、26年に哈爾濱特別市が設置されて旧附属地の行政に当たった。黒崎氏が所蔵する絵葉書にはこれに伴い新設された公共施設を撮影した絵葉書がいくつか存在するが、得に秦家崗に1925年に建設された普育中学は伝統的な中国建築の様式を採用し、ナショナリズムの高揚を繁栄したものを見ることができる。更に同地区の東部には23年に極楽寺、26年に孔子廟が創建され、ハルビンにおける中国伝統文化を象徴する建物として以後の組み物の絵葉書では必ず取り上げられる話題となっているが、こうした施設が旧附属地に建てられたということにも同時期の中国側によるナショナリズムの一端がうかがえる。そして旧来からの中国人街である傅家甸についても、路面電車の開通は公園の開設など都市基盤の整備が進められ、繁華街にはいわゆる「中華バロック」の建築群が立ち並ぶなど以前に増して繁栄を遂げており、同時期はロシアに代わり中国人がハルビンの主人公の地位を占めた時代であるという印象を我々は絵葉書から強く感じ取ることができるのである。

一方で1919年から22年にかけては日本軍がシベリアへ出兵し、ハルビンを含めた北満にも進駐した。ハルビン駅で日本軍の到着を出迎えるおそらく白系ロシア軍と思われる部隊を撮影した絵葉書(図2)は、その貴重な証人である。ハルビンに居留する日本人も同時期には増加し、1920年に日本居留民会館が埠頭区に建てられて館内には伊藤博文の胸像が安置された。同年にはキタイスカヤ街に日本資本の松浦洋行が開業し、23年には居留民の子弟教育のための埠頭区の一角に桃山小学校が開校した。これらも絵葉書の題材として数多く取り上げられているが、

いずれもドーム屋根を冠した純洋風の一大建築であり、ロシア人と中国人に伍して勢力を伸張しようとする中で、「文明国」の一員であることをアピールしようとした同時期の日本人の姿勢をそこから強く感じ取ることができる。



図2 シベリア出兵時ハルビン駅

③ 満洲事変後

ハルビンを取り巻く情勢の更なる転機となったのは、言うまでもなく満洲事変である。これによりハルビンは完全に日本の支配下に置かれ、1935年には中東鉄道買収によりソ連も撤退した。政治的影響力の確立により三カ国の中で日本の存在は圧倒的なものとなり、日本人の活動も格段に活発化していった。こうした変化は黒崎氏の所蔵する絵葉書にも反映しており、収録した絵葉書の多くは事変後に作成されたものと思われるのだが、その内容も以前と変化していくこととなった。そのことを象徴的に物語るのが、ハルビン駅の光景を題材とした絵葉書である。もともと東清鉄道により建設された同駅はアール・ヌーヴォー様式の美しい建物であったが、満洲事変後はまず駅前に満洲国の「建設記念碑」が建てられた。そしてその後駅舎正面の屋根上には「大満洲国」の看板が取り付けられ、内部には居留民会館より移された伊藤博文の胸像が安置された。大連からの「あじあ号」が毎日運転されるようになり、そのハルビン駅発車を題材とした絵葉書も出されたが、その内容を見ると「偉人伊藤」の殉難の地というイメージと巧みに重ね合わせた構成であり、印象深い。こうした特徴的な形での変化としては、このほかにも秦家崗の中央寺院に向き合う形での哈爾濱神社の創建や郊外における忠霊碑、日露戦争の志士・烈士の追悼碑の建立などが挙げられ、いずれも組み物の絵葉書には欠かせない題材として取り上げられるようになっている。

一方で埠頭区においては、より生活に密着した形での変化が進行していくこととなった。同地区にはモトスワヤ街や地段街を中心に日本資本のデパートなどが相次いで進出し、日本本土と同様の消費生活を享受できるようになっていった。まさに同時期に「日本化」と称されたような変化が同地区を部隊に進行し

ていったのであるが、それは絵葉書の隅にさりげなく写し込まれた「おでん」の看板(図 3)や「英霊に最敬礼」(図 4)の標語などからもうかがうことができる。依然としてロシア時代の異国情緒は色濃く残しつつ、新たに日本的な要素が次々と持ち込まれていく。特に日本人にとってのハルビンイメージが同時期にこうした形で形成を見ていったことが、絵葉書の内容より見て取れるのである。



図 3 松浦洋行前「おでん」看板



図 4 モデルンホテル前「英霊」標語

そのことを具体的に表す題材が、「歓楽の都市ハルビンに遊ぶ」と題された組み物の絵葉書である。日本人男性がハルビンを訪れ、そこで二人のロシア美女を同伴して市内遊覧を楽しむという設定の内容であり、続編も作られているが、そこでたどった以下のようなルートは、恐らく当時の日本人にとっての定番遊覧コースであったのだろう。

ハルビン駅→松花江河畔→埠頭区(プリスタン公園・キタイスカヤ街など)→秦家崗(中央寺院・チューリン洋行など)

こうした絵葉書の内容からは、しかし日本による支配の限界も同時に見て取ることができる。この組み物では上記のようにハルビンのもう一つの主要な地区

である傅家甸には足を踏み入れていない。同地区を題材として取り上げた絵葉書自体は多数存在するにも関わらず、日本人による遊覧の対象には含まれなかったことの背景をどう考えたら良いのであろうか。恐らくは「日本化」の外にあるという同地区の特性が関わっているのではないと思われる。事変後も以前と変わらぬ「殷賑」「繁栄」ぶりが強調される一方で、そこは「純粹の満洲人街」として描写され、「日本化」と形容できるような変化の兆候は、少なくとも絵葉書の上からは読み取ることができない。こうした傅家甸の他の地区との違いに関しては、日本の支配に対する中国人の根強い抵抗の結果と解釈することもできようし、また政治支配の変動にも関わらず日々の営みを変わず続けていく中国人の逞しさの賜物と見ることもできよう。明白なのは、こうした傅家甸の繁栄を絵葉書はただひたすら外部から傍観する形で取り上げていることであり、その製作者がほとんど日本人業者であったことを考えれば、事変後の日本による満洲支配の一側面がそこから読み取れるようにも思えるのである。

3. 本システムについて

3-1. 本システムにより初めて視覚的に顕在化されることについて

2.1 節で述べた絵葉書資料の可能性は、いずれも、大量の絵葉書を時空的に整序した上で比較対照することで開花するものであるが、従来の歴史研究においては、この大量な画像情報を時空的に整序する方法を、個人の超人的な努力や、大量の人材を集めたかつ持続的(資料が大量にあるために、情報の追加登録が持続的に必要なため)に投入する研究環境以外に見出せずにおり、事実上、絵葉書を駆使した研究は「可能性」の域を出るものではなかった。

しかし、本研究では、絵葉書資料整序上の中核的データである時空情報を一挙に検索・開示するインデックスシステムとビューシステムを開発したことで、この限界を突破することを可能にし、絵葉書資料を歴史研究に利用していく新たな資料空間の創出に道をひらくこととなっている。

3-2. システム概要

ユーザは当システムにアクセスすると、Ajax を用いることにより一度の画面遷移も伴わずに全ての情報を引き出すことが可能である。ページにアクセスすると、クライアントの読み込んだ JavaScript がサーバ上の PHP を通じてデータベースに登録されているデータの画像情報・登録地点の緯度経度等を照会し、サムネイルの生成・Google Maps 上のマーカー表示を行う(図 5)。なお、本システムでは Ajax を用い非同期にサーバとの通信を行っているが、その通信のデータフォーマットとして JSON (JavaScript Object Notation) を採用している。JSON はデータ

交換フォーマットの一つで、JavaScript (ECMA-262 標準第 3 版 1999 年 12 月)の一部をベースに作られている。いくつかの理由から XML よりも JSON の方が高速にパージングできるとされている。また、JSON は XML よりも記述量が少ない。Ajax の語源ともなっている XML が汎用性も高くよく利用されているが、これらの理由から本システムでは JSON を採用した。

ページは大きく分けて、テキストボックス、サムネイルギャラリー、Google Maps、詳細情報に分割することができる。これらはすべてユーザの操作により連携して動作する。動作の制御には JavaScript を使用し、これによりインタラクティブな動作を実現している。以下ではそれぞれの部分について紹介していく。



図 5 本システム初期画面

(i) テキストボックス

テキストボックスに入力された文字列は即時にサーバに送信され、データベースに登録されている地点の名称と照合される。データベースに予めふりがなも登録しておくことでふりがな検索も可能になっている(図 6)。

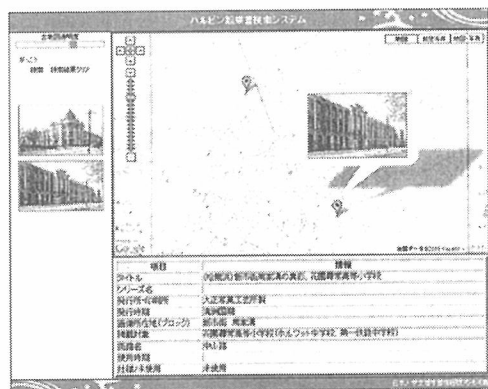


図 6 キーワードによる検索結果

(ii) サムネイルギャラリー

ギャラリーにはデータベースに登録されている全ての絵葉書画像を表示する。サムネイルをクリックすることで Google Maps 上のマーカーへ移動し、詳細情報に選択された絵葉書の情報を表示する。また、テキストボックスに文字列が入力された場合、その文字列を含む絵葉書のみをギャラリーに表示する。

(iii) Google Maps

Google Maps 上にはデータベースに登録されているすべての地点にマーカーを表示する。マーカーをクリックすることでその地点の絵葉書を吹き出しの中に表示し、詳細情報を表示する(図 7)。また、吹き出し中の絵葉書をクリックすることで、ページ上にその絵葉書を大きく表示することができる(図 8)。サムネイルギャラリーと同様に、テキストボックスに入力された場合はその文字列を含む絵葉書の地点にのみマーカーを表示する。



図 7 絵葉書と詳細情報表示



図 8 絵葉書の拡大表示

(iv) 詳細情報

ここにはそれぞれの絵葉書の詳細情報を表示する。表示する内容はタイトル、シリーズ名、発行所・印刷所、発行時期、画像所在地、掲載対象、街路名、使用時期、使用/未使用である。

この様に、それぞれの絵葉書の情報を整理し地図

への対応を明確にすることにより本システムでは、アーカイブした絵葉書の画像で探す画像検索、絵葉書に描かれている地名をキーにしたキーワード検索、Google Maps 上からの地点検索の3種類により、視覚による記憶、地名の知識的な記憶、地理的記憶からのアプローチが出来るため検索も容易に効率よく出来ると考えられる。

4. 終わりに—歴史学研究における本システムの可能性

本研究は、歴史学研究および歴史教育が現在直面している課題の克服の可能性に道を開くものといえる。この点を、戦後日本における歴史学研究の趨勢をふまえて概述しておく、以下の通りとなる。

(1) 前提となる研究史上の背景:

戦後歴史学は、大きく次の二つの方向性で(無論、相互に関連しつつ)その研究成果を蓄積してきた。

(イ) 一つは、より正確な「事実」の確定を如何に図るかという点である。これは、言うまでもなく、「より確かな未来は、より確かな事実の上に築かれる」というテーゼを背景とするものであり、荒廃した第二次世界大戦後の世界に共有されたテーゼでもあった。

この課題に対して、歴史学は、資料批判的方法的深化(個々の資料の信用度の確定)と、複数の資料(複数視角)からの事実確認(そして、それを可能とするための資料発掘)という二つの方法を鍛えていくこととなった。

(ロ) もう一つは、ある事実発生の原因と結果との関連(因果律)の解明という点である。それは、「科学的」に、別言すれば、「法則的」に追究されるべきであるとの方向性を強く持つものでもあった。この背景には、人間の恣意性を越えた「真理」(歴史の発展法則)を見出すことで、合理的な判断を越えた人間の様々な精神(恣意性)の発露として推進・展開されたと目された日独をはじめとする「侵略」行為の反復を回避せんとする意図が存在していた。ここには、第二次世界大戦において、敵味方を問わず凄惨な事態に遭遇した人類の経験を、「真理の光」により繰り返さないという共通のテーゼがあったと言える。

この課題に対して、歴史学は、主に、各時代に通底し客観的に摘出が可能な事象に着目して、その構造と展開の因果関係を法則的に再構成していく方向で研究を進めていくこととなった。マルクス主義史的唯物論の「下部構造決定論」が、歴史学研究に大きな影響をもった所以もここにあったと言える。

(2) 歴史学研究の転換点と新たな課題:

しかしながら、上述した歴史研究方法は、結果として、大きく分けて二つの問題点を生み出すこととなり、それは 1980 年代に入り顕在化し、21 世紀の今日、

はっきりした新たな課題を歴史学に提示するに至っている。

本項上述(1)の歴史研究が結果として生み出した二つの問題点とは次のようなものだった。

(イ) 個別事実それ自体のより正確な把握は、個々の事実を言わば「孤立」的な存在と見なしていく方向を生み出すこととなった。

即ち、個々の事実が、ある時期に確かにそこに実存したという事実の確定をはかることを第一義とするあまり、個々の事実が他の諸要素と如何なる連関性の中に存在していたのか、あるいは、クロスチェックが可能となる様々な資料(複数の視角)がそもそも何故存在しているのかという問いを、言わば「背景」に追いやってしまい、歴史学が正確でより細かい年表作成の作業であるがごとき印象をもたらす傾向を惹起することとなったのである。

それは当然、個々の事実がその前後の事実と如何なる連関性を持つものだったのかの問いを等閑視するか、歴史学を「人文科学」として、その使命を「歴史法則」を追究する「社会科学」への素材提供学と位置付けることで、個別事実の追究に邁進することに安住する傾向を生み、歴史学の動的な歴史認識の可能性を大きく狭めることとなっていた。

(ロ) 他方、歴史の動的な把握を担うはずの因果関係を法則的(科学的)に追究する研究手法においても、歴史像の単線化と呼び得るような事態が惹起されていた。

即ち、歴史発展の根本的(本質的)事象と認定されたもの以外の諸事象は、瑣末・例外的あるいは偶発的なものとして、研究の対象もしくは歴史像の再構成要素から排除されることになってしまう事態が生じ、多様に展開する歴史の諸事象が、あたかも「なかったもの」あるいは「価値のないもの」とみなされる傾向をうむこととなっていたのである。

これらの状況は、1980 年代以降において顕在化した様々な世界の現状から激しい「挑戦」を受けることとなる。本研究との直接的な関連性を踏まえて一例をあげれば、次のような現状からの「挑戦」があった。

1980 年代後半以降顕在化したグローバリゼーションの展開は、世界の画一化への安寧な移行などではなく、むしろ異なる歴史的展開の中で形成され現存する多様で重層的な世界を浮き彫りにしつつ、その激しい切り結びの中で進展していくものであることを白日の下に晒すものだった。その現状で切実に求められていたのは、不可避的に進むグローバリゼーションの展開の下で、激しい切り結びが暴力的連鎖に発展することを如何に食い止め、各主体間の尊厳と安定を保持していくかということだったが、そこでは、単に事実を確定できれば直ちに処方箋を描けるといった確証はどこにもなく、そもそも、ある事象が

如何なる他の事象と如何なる形で連関して生起し、その結果、その連関事象の間で如何なる相互変容が起り得るものなのかを正しく世界的なレベルで確認することが求められていた。当面の「対処療法」だけではなく、答えを時空的な広がりの中で創出していく知的能力が求められていたのである。このことの切実さは、所謂「9・11」以降における、テロ等に象徴される暴力の連鎖が改めて顕在化しつつある国際社会においてより切実な問題となっていた。

このような現状に対して、前述した歴史学の現状は、当然ながら、その知的営為としての「無力」さを露呈することとなっていた。なぜなら、上述した研究状況の中で歴史学は、ある事象の表層性を越えた存在構造や可能性を、事象の多様性を担保しつつ追究することをなおざりにしてきたからである。差し迫る現実的課題に、間接的にせよ、一定の今日的な意義を提示できない歴史学は、その存在の今日的意義を大きく問われる事態となっていたのである。

(3) 本システムの可能性

上述してきた歴史学の研究現状をふまえる時、本システムが持つ重要な意義も自ずと明らかとなる。なぜなら、「2.」で述べた通り、本システムにより初めて開示される絵葉書の資料的可能性は、上述した研究の今日的意義を確保する上での要件を備えるものとなっているからである。

即ち、景観変容の再現に象徴されるような、ある事実の確定とその変容を、時々の「時代的精神」という表層的領域の関係性のみならず、より深層領域にある時々の副次的あるいは潜在的な関係性にまで掘り下げて顕在化させることを可能とする本システムは、今日切実に求められている対象の持つ多様性と重層性、更には、他の存在との相互連関的・相互変容的な関係性を、視覚的に我々に提示するものだからである。暴力の連鎖が他者の多様性や重層性から目を逸らし、他者の単純化を大きな起因としていることを踏まえると、その重要性和今日性はより明確であろう。

その意味で、本システムは、特定資料の検索と抽出の利便性向上という従来のデジタルアーカイブが持った可能性に、対象に対する既存イメージの拘束から解放し新たな世界現状に対応した新たな歴史的認識を創出することに繋がる言わば知的創造に向けての揺籃的空間へと発展させていく可能性を持つものとなっているとも言えるであろう。

勿論、そのような可能性をより明確にするためには、今後、絵葉書は勿論のこと、文学等の様々な関連データの追加や、それらをより正確に地理情報とリンクさせるために GIS を駆使したインデックスやビューアのシステムの作製が不可欠となるが、そのような課題を克服していけば、本システムは、歴史学教育における「入

門領域」の教材としても十分使用が可能となることを最後に付言しておきたい。

謝辞

黒崎裕康氏より「ハルビン絵葉書(黒崎コレクション)」のデジタル化・学術利用の許可およびいくつかのランドマーク物件の位置情報に関する助言をいただいた。二人の査読者より有益なコメントをいただいた。隈部宣道氏、谷中理枝氏には、システム開発に協力いただいた。ここに記して謝意を表したい。

本研究の一部は平成 19～21 年度基盤(C)「中国反日運動と歴史継承の現地構造との連関実態の解明: 中国東北地域を事例として」(研究代表: 松重充浩)および日本大学文理学部情報科学研究所共同研究「東アジアにおける都市形成の近代的プロセスとそのデジタルアーカイブをめぐる研究の再構築」(研究代表: 加藤直人)の助成を得て行われている。

参考文献

- [1] 毛利康秀: 絵葉書研究史から見たハルビン絵葉書の位置づけとデジタルアーカイブ化の意義, 日本大学文理学部情報科学研究所年次報告書, No.8, pp.55-64, 2008.
- [2] 貴志俊彦: 「戦前期, 東アジア絵はがきデータベース」の使い方, アジア遊学, 113, pp.76-77, 2008.
- [3] 日本大学文理学部情報科学研究所「デジタルアーカイブ・インフラストラクチャの構築と高度利用」デジタルアーカイブ基盤システム URL: <http://da.chs.nihon-u.ac.jp/da/>
- [4] 本システム公開 URL: <http://ahj.chs.nihon-u.ac.jp/harbin/>